

みんなばくを持ち帰る

鈴木紀

民博先端人類科学研究部

ミュージアムのあり方が変わるにつれて、

展示に関連した品が手に入るミュージアム・ショップに、期待される役割も変わっていく。民族学博物館のショップであればなおさら、ただ世界のものが手に入るだけではなく、博物館と生産者と消費者、この三者をつなぐ役割が求められるのではないか。

ミュージアム・ショップの草分け

一年前、本コーナー「多文化をあきなう」の連載を開始したとき、途上国の人びとが作った民芸品を販売するフェアトレード・ショップを「街の民族学博物館」とたとえてみた。モノを通じて、それを作った人びとの暮らしを想像できる点が博物館と同じだからだ。そして、気に入ったモノを実際に購入できるところが、本物の博物館にない利点だとも述べた。だが、多くの博物館にはミュージアム・ショップがあるのも事実である。それを楽しみに博物館を訪れる人も少なくないだろう。そこで今回は、みんなばくミュージアム・ショップをとりあげ、どのように多文化があきなわれているか注目してみたい。

みんなばくミュージアム・ショップは、日本におけるミュージアム・ショップの草分けといわれる。国立民族学博物館開館当時から、財団法人千里文化財団（一九八三年まで民族学振興会千里事務局）

ド商品だ。フェアトレードとは、途上国の商品生産者支援を目的におこなう貿易のことである。売れ筋はフェアトレード・チョコレートだ。このチョコレートは、南米ボリビアのエル・セイボ組合が生産したカカオ豆を原料に使用している。同組合は、誠実にフェアトレードに取り組み、着実に成果をあげてきた生産者団体のひとつである。他にも、ミクロネシア連邦ボンベイ島の日系人の農場で収穫されたコショウを佃煮にしたものや、ラオス南部の町サワンナケートに伝承される藍染・草木染の手織り木綿を使用した製品など、生産地の特産物や技術をいかした商品を、現地情報を紹介しながら販売している。

地元支援の商品は「みんなばくクッキー」である。このクッキーは吹田市の生活介護事業所ぶくぶくワールドの製品で、ミルクとチョコレートふたつの味が楽しめる。同事業所は一九九〇年から障がい者の雇用創出のために、食品添加物を使用しない安心、安全なクッキーを製造している。パッケージをデザインしたのは、武庫川女子大学の学生たちだ。彼女たちがみんなばくの展示場を見学して着想をえた仮面のイラストが、箱を飾っている。

東日本大震災の被災地で作られた商品もある。一つは岩手県山田町の醤油である。さしみ用で甘めの味に特色がある。津波で店舗を失った山田町の企業が製造する製品を、復興支援のために販売している。もうひとつは、宮城県南三陸町の「きりこ」グッズである。きりことは、神社の神職が正月の神棚飾りのために縁起物を切り抜いた半紙のことである。地元の女性による「彩（いろどり）プロジェクト」が中心となり、震災後、きりこを復興のシンボル

が経営し、現在ではネット通販ワールド・ワイド・バザールも開設されている。「みんなばくを持ち帰ろう」をコンセプトに、来館者が展示場でえた感動を自宅までもって帰れるような商品をそろえている。販売されている商品の種類は、世界の国々でつくられた民芸品を中心に一〇〇〇種以上にのぼり、カレンダーやポストカード、文房具などのオリジナル商品の人気も高い。書店も併設し、民族学・文化人類学関係の書籍やCDが売られている。

生産者を支える

近年、みんなばくミュージアム・ショップでは、生産者の暮らしを支える商品が販売されるようになった。ショップのなかほどに、そうした商品が並ぶコーナーが設置されている。そこでのキーワードはフェアトレード・地元支援・被災地支援の三つである。

このコーナーで目につくのはやはりフェアトレードとして商品開発をおこなった。ショップでは、きりこのデザインをあしらったTシャツやタンブラーなどを扱っている。

顔が見える

こうした商品がみんなばくミュージアム・ショップの一角を占めるようになってきたことは、みんなばくの社会的な使命が変化していることと軌を一にしている。かつて博物館に期待されていたのは、専門の研究者による学術的成果を一般に伝達する機能だった。そのためそこで情報の流れは、博物館から来館者へという一方通行が普通だった。ところが現在みんなばくではフォーラム型展示を目標に掲げ、展示品の制作者、研究者、来館者の三者のあいだの対話や情報共有を試みはじめている。これは来館者にとって、みんなばくが単に異文化に触れる場所ではなく、異文化の人びとと交流するきっかけをえる場所へと変化していくことを意味している。

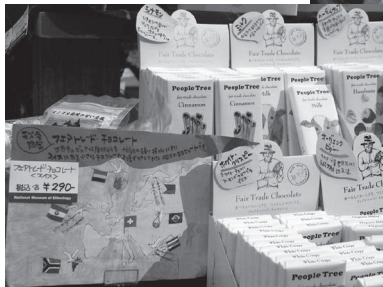
したがって「みんなばくを持ち帰る」ためには、みんなばくミュージアム・ショップで扱う商品も、なるべく生産者の顔が見えるものであることが望ましい。どんな人がどのような思いでつくったモノなのかわかることが重要だ。それを購入した来館者が、生産者の暮らしが安定したり、伝統的な技術が維持されたりすることを想像できるならば、それはその商品の新しい付加価値になっていくだろう。その際みんなばくの研究者が、生産者と来館者相互の交流を促進する役割を担うことも必要だ。みんなばくのフォーラム型展示に対応した、みんなばくミュージアム・ショップの今後の展開に期待したい。



お祭りでは踊るボリビアのエル・セイボ組合の女性たち



きりこをデザインしたTシャツ



フェアトレード・チョコレート (本号p13にて紹介)



みんなばくクッキー

みんなばくオリジナルスタンプ



みんなばく1階にあるミュージアム・ショップ